

# 一 明治期の跡見女学校

## 1 明治女学はじめ

明治二年（一八六九）五月二十一日、京都で最初の小学校が、上京二十七番組（柳池）小学校として開校式を挙げた。学科は筆道、算術、読書の三科で、初・中・上の三等とした。花蹊の在京時代で場所も数百メートルの近隣だったが、言及記録は見当たらない。

その京都では女学校に相当する「新英学校女紅場」が開設され、英語、裁縫、手芸を教えた。明治五年（一八七二）四月の開設で、後に京都府立第一高等女学校となった（福沢諭吉『京都学校記』明治五年六月）。

花蹊の郷里木津では、跡見家の寺唯泉寺に「第五番学校」（小学校）が明治七年（一八七四）に開校し、句読、習字、算数を教えた。明治十四年（一八八一）の新校舎「木津小学校」まで続いた。初代校長とは花蹊も交流を密にして、花蹊の喜寿に

は学校と生徒一同に記念品を贈っている。

明治五年九月には画期的な「学事奨励に関する被仰出書」、ついで「学制」の公布で国民皆学の大号令が告げられ、近代的教育制度が歩み出すことになる。

花蹊の身边では、明治四年（一八七二）十月二十一日、御所の大広間に召されて、華族に、明治天皇が親しく奨学の勅諭を賜り、特に海外留学の奨励、女子教育の必要を告げられた。主君の公義君は陛下のお言葉に促されたのか、翌五年九月にドイツ留学のため横浜港を発った。

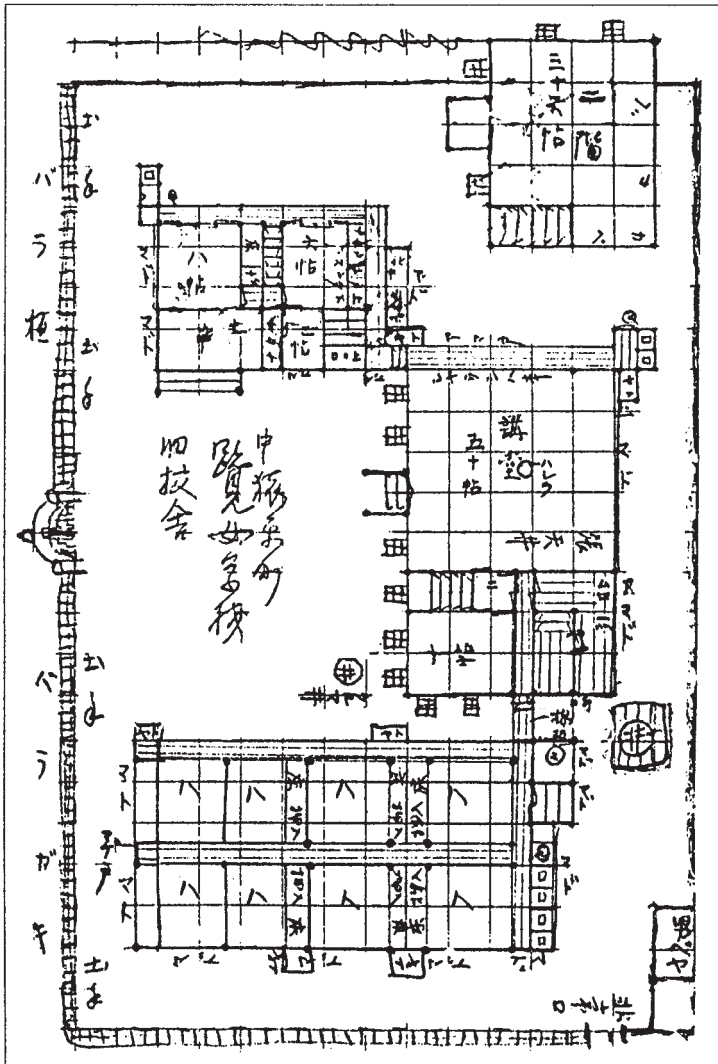
海外留学といえば、近代女子教育史上の快挙といつてよい、津田梅子ら五人の少女たちのアメリカ留学の破天荒ともいうべきことがあった。梅子は明治十五年（一八八二）暮に帰国して、華族学校などを経て、後に「女子英学塾」を創設し、英語教育に先駆者としての異色の足跡を残した。

神田は近代日本の女学校のメッカといつてもよ

神田中猿楽町の跡見学校校舎正面



二代目校長跡見李子の姉伴子の書き留めた校舎見取り図



い。明治五年二月、国立の東京女学校が竹橋に創設され、その白山通り向う側に、私立学習院が明治十年（一八七七）十月、天皇・皇后親臨の下、男女別棟で開業した。水道橋を渡った丘には、明治八年（一八七五）十一月、官立の東京女子師範学校が女子教員養成を図って開校した。

その白山通りの中程、神田区中猿楽町十三番地こそが、「私立跡見学校」の創学の地であった。時に明治八年であった。

(1) 跡見学校―教科の特色

明治九年の秋（九歳の時）私は神田猿楽町の

角の跡見学校へ入学のため、花蹊先生のお住居の玄関に立った。

正面は四角な赤・青・紫の色硝子のはまつた校舎の扉で、その頃はこういう物も珍しいのだった。花蹊先生の姉君千代滝様という色の白い、ふくふくした方がお会い下され、お師匠様となえる花蹊先生も出ておいでになった。「ようお出でやしたナア、かしこそくな子やナア、名は何とおいいやすか」等といわれる京弁に、母はまごまごしておられた。私はこれが面白くてニコニコしていた。翌日からこの学校―仲猿栗町の角の薔薇垣の回らしてある通称バラ学校などといわれている跡見学校へ往復の供を人力車でしてくれた。

学校は門の左が奥の人の住居、右が寄宿舎で八畳の間が両側五つ間だったか並んでいた。廊下で続いた真中が五十畳と八畳の間があり、台所があつて、二階は二十畳ほどのたたみが敷いてあり、外側は洋館のようになっていて、壁は紙張りとなっていて。机が二脚ずつズラリと幾側も向う前に並列していて、座ぶとんをしき坐つて学ぶのであつた。

お師匠様は隅の一方にグルリと机をまわして坐つておいでになる。窓の上に木札がかかっている。入学の順番がそれで知ることができる。生徒の数はその頃百人計りであつた。

跡見学校は女性にふさわしい教育をする所として花蹊先生の徳望はみとめられた。少し世の中に知られた家庭の子女は此処に入学を求めた。お師匠様が関西の方でいらつしやつたから、お公卿様の子女が多かつた。

科目は教場(おセツパ)といつて習字と画の稽古、国語は小学読本、日本地誌略、日本外史、十八史略など、其の上は蒲生重章先生がおいでになつて教えられ、お師匠様も習つておいでになつた。数学は女の先生で加減乗除などならつた。級がわかれているのでなく極々気軽な自由な学校だつた。

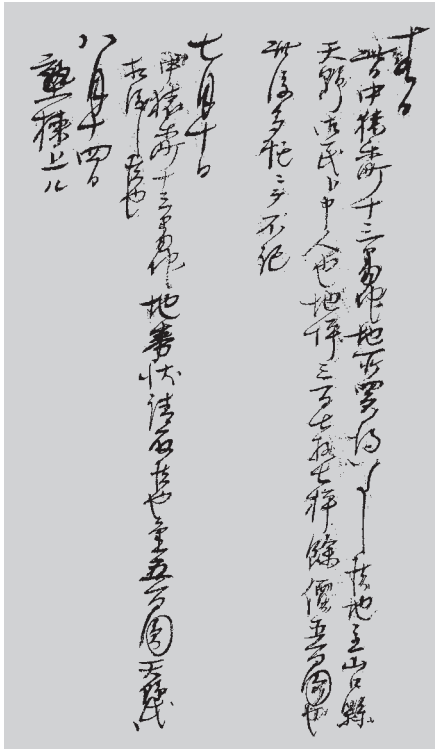
(三宅花園、旧姓田辺龍子)

折から主君姉小路公義は独逸留学中で留守でもあり、父重敬翁は点茶を、千代滝姉は裁縫を、琴は山登松齡翁の高弟伊豆江刀自の受け持ち。弟、愛四郎もまた花蹊を実務面で助けた。

明治八年一月八日

：八日吉辰を以て開校式執行す。華族之方々  
姫方等も来賓の多き実に驚人たり。これより  
跡見女学校と称して、女子教育に従事する。  
国語、漢籍、算術、習字、絵画、裁縫、琴、  
插花、点茶之九科目とす。（『跡見花蹊略歴』）

明治八年（一八七五）新春早々に待望の開校式に  
こぎつけた記事である。明治五年（一八七二）八月  
学制頒布以来、心を砕いていた年来の女子教育の  
夢をここに実現することができたのであった。地



『跡見花蹊日記』明治八年の条にみる中猿楽町十三番  
地の地所買得、地券状請取、塾棟上げの記事

所を買得し、塾の棟上げも終え、そこで改めて当  
局に「私学開業願」を十一月十三日付で提出した。  
書類は文部省交付の「小学規則」をいねいにな  
ぞつて書かれていた。

## (2) 学校生活

創学当初の史料は必ずしも十分とは言えない。  
明治五年「学制」が発せられて、庶民も男女の別  
なく、就学を奨められ、世間の期待もようやく高  
まる。その初期の跡見学校の動静は大いに注目さ  
れ、記事になった。

前に引用した、田辺龍子(花圃)の回想記はさす  
がに、近代女流文学者の魁『藪の鶯』の作者だけ  
あつて、生彩に富んでいる。

文明開化の新風景として、女学記事は珍重され  
たであろう。次に紹介する文章も明治十一年（一  
八七八）十一月二十八日『朝野新聞』掲載の記事  
である。

去る廿四日は跡見女学校の開業三年祭にて  
生徒の試験あり、観客群集し清国公使も参ら  
れ頗る盛会なりき。講堂の正面には神床を設  
け、八意思兼の軸を掛け、神祇は悉皆生徒が

少年少女雜誌『穎才新誌』に掲載された生徒の絵と書

# 穎才新誌

東京  
跡見學校生徒合錦



春去夏來花正稀  
新篁喜々過柴扉  
蠶蚕務已了  
人無事閑對草  
山  
繡葛衣  
戊寅  
夢秋節  
泥膏并景  
繪近製

夢秋節  
繪近製

繪近製

彩袖羅裙妍を競ひて備へられ、右畢りて講義及び書画合作、或は自作の詩を録するも有りて、何れも筆力縦横、観る者皆々感ぜざるはなかりし。当日講義されし人々は、国史纂論、三条智恵子(六歳)、蒙求、三条西演子(七歳)、小学、秋月蘭子(七歳)、川村仲子(八歳)、同福子(八歳)、齋藤仁子(十一歳)、左伝、萬里小路伴子(十一歳)、板倉棲子(十一歳)にて、自作の詩を書かれしは細川熊江、飛鳥井栄子、波多野元子、石川順子、板倉棲子、萬里小路伴子の六名。

当時の授業や行事をうかがうことができよう。

一方、四、五歳から一七、八歳くらいの塾生の放課後、夜の生活、お遊びなど盛り沢山の工夫や演出で賑やかなことであった。

花蹊はつとめて旧来の風習・行事に合わせてのお娯<sup>たの</sup>みを催し、季節にちなんだ行楽も行つて、塾生の生活に潤いを与え、情操の涵<sup>かん</sup>養<sup>よう</sup>に意を用いたのであった。花蹊の考案した、今様歌に合わせた就寝前の「運動踊」は文部省のお歴々も視察にみえたというほどに注目された。また、課外的に用

意した、点茶、琴曲はともに「学校茶道」と「音楽(邦楽)」の鼻祖として史家の評価がある。

## 2 柳町への移転

### (1) 新校舎

『跡見女学校改築之主旨』

明治八年初テ我跡見女学校ヲ神田区中猿樂町ニ設立スルヤ、国事草創教育ノ制未ダ其緒ニ就カズ、都下僅ニ、二三ノ校舎アルノミ

その他も、

今ヤ人烟稠密ノ街衢トナリ、教育ノ制亦往日ノ面目ヲ一新セリ。加フルニ生徒群集シ、校舎太ダ狭隘ヲ告グルヲ以テ再ビ閑散ノ地ヲトシ、更ニ壮大ノ校舎ト幽曠ノ庭園ヲ営ミ、大ニ改良ノ方法ヲ施シ、以テ完全ノ女風ヲ養成セントスル

とはいえ、「とうてい一個人の及ぶ所にあらず」として、

原、茂木、西村、川村、田村、米倉ノ諸君ニ謀リ、幸ニ其賛成スル所トナリ、且同志諸君ノ贖金ヲ得タルヲ以テ、昨明治二十年四月地ヲ小石川区柳町ニ相シ、八月初テエヲ起シ、十二月下旬ヲ以テ全ク其功ヲ竣リ、即チ本日ヲ以テ皇族、大臣、及ビ貴女、紳士ノ来臨ヲ辱ウシ以テ開校ノ盛典ヲ挙行スルノ栄ヲ觀ルコトヲ得タリ

と厚く謝意を述べ、さらに本校のあるべき任務を次のように謳いあげた。

抑モ一国ノ富強ハ教育ニ依テ興リ、教育ノ盛衰ハ女学ヲ以テ徹スベシ。況ヤ我校ノ任タル、上流子女ノ教育ニアルヲ以テ務メテ窈窕嫺雅ノ女徳ヲ養成シ、智ヲ研キ交ヲ弘メ、以テ、我邦女風ノ模範タラザル可ラス

続いて生徒総代三条智恵子の祝文、三条内大臣、中村正直氏らの演説があり、近衛楽隊の奏楽、無数の球灯の庭園狭しと、豪華な祝賀、式典は都下の語り草になった。

「同校新築の敷地は凡そ二千坪、総建物四百三十八坪余、運動場二百十坪、庭園千三百五十坪にして、講堂、寄宿舎、浴室、客間を始め諸部殆ど完備せり」と明治二十一年（一八八八）一月十四日の『女学雑誌』が伝えた。

神田時代の女塾的スタイルを一新して、都下有数の跡見女学校の充実した、いわゆる柳町時代の教育がスタートしたのであった。

明治も十年代に入ると、女子の就学率も順調に伸び、女学校新增設への要請も高まった。明治十五年（一八八二）には、東京女子師範学校に付属高等女学校の設立をみ、女子の高等普通教育機関としての最初となった。明治十八年（一八八五）十一月には、旧学習院女子部を独立させて、四谷に「華族女学校」を開き、平民にも門戸を開いた。

一方、日本人によるキリスト教主義の教育を意図した「明治女学校」も同十八年十月に開学する。かくて、明治二十八年（一八九五）一月二十九日付けで、初の「高等女学校規程」が文部省から発せられた。「本令ニ依ラザル学校ハ高等女学校ト称スルコトヲ得ズ」の条項に、あえて独自の教科体系を採って「跡見女学校」で通したのであった。



(2) 第一回卒業式

『花蹊日記』によると、柳町開校式典直後の明治二十一年、

(二月)十三日

授業始。英語、東三条公恭君、宇都宮平三氏、遠藤氏、レ、ン嬢。算術、松見文平氏。国学、鈴木弘恭氏。国漢学、渡辺重石丸氏。裁縫、千代滝。音楽、山登松齡。点茶、插花、父重敬。

と記載している。

英語教員の東三条公恭君は異色、三条実美公の甥に当たる。

この記載からは教学上の新構想は判然としない。この教師名の父重敬翁は明治二十二年(一八八九)六月に、また姉君千代滝は明治二十四年(一八九一)暮に没するという悲運に遭う。ともに花蹊を扶けて跡見学校磐石の礎を築いた肉親であった。

画期的といえば、明治二十三年(二八九〇)四月六日、第一回卒業式を挙げて、一三名の卒業生を送り出したことである。

その姓名を挙げると、

跡見李子、齋藤仁子、片岡君子、松野鏡千代、萬里小路富子、秋元沢子、朽木鋪子、田辺朝子、三橋久子、田村増子、山口君子、中村文



子、新野初子。

跡見李子おもてこの時、二十一歳、もと、公卿萬里小路通房の次女、姉の伴子とともに早くから花蹊の塾に入り修学をした。のち、花蹊の養女となり、明治二十五年（一八九二）籍を移して跡見姓になる。神田時代から舎監として花蹊を扶け、習字・絵画を教えた。大正八年（一九一九）校長になる。

花蹊はこの第一回卒業式訓辞に際し、卒業生の姓名を読み上げ、次の如く述べた。

本校ハ明治二十一年一月ヲ以テ此地ニ移転シ大ニ校則ヲ釐革シ教育ノ方法ヲ改良シ以テ旧来ノ面目ヲ一新セリ。今回卒業ノ諸嬢ハ実ニ本校改革以来第一回ノ卒業生ナリ余ハ諸嬢ノ善美ナル成績ヲ見テ本校カ僅カ二年ノ間ヲ以テ能ク其改良ノ実功ヲ奏セシヲ喜ヒ又此実功ヲ奏セシハ諸嬢黽勉ノ力ニ頼ルコトヲ思ヒ其修業ヲ証明スルニ当リ厚ク謝意ヲ表シ且大ニ其将来ニ望ム所アラントス、夫レ諸嬢ハ皆我邦上流淑女ノ地位ヲ占メ天下女子ノ瞻仰スル所ナリ、其一言一行ハ以テ天下女徳ノ盛衰

### 一三歳の女弟子の御前揮毫

明治八年の開校と同時に入学し、花蹊の絵画の一番弟子として、関西で活躍した、波多野華涯（元子）と花蹊先生についての、素敵なエピソードを紹介しよう。

「この絵はね、お前の曾おばあさんが一三歳の時、恩師の跡見花蹊という偉い先生に連れられて、宮中に参内して、両陛下の御前で描いたものなんだよ。」と父はいつも楽しそうに語ってくれました。侍従の後について、美しい薬玉の良い香りのする廊下を進むと、とうとう玉座の前に着いた。部屋には絵筆の用意がしつらえてあった。華涯はお師匠さんに促がされて、絵筆を執つて、この孔雀の絵を描いたんだよ。両陛下の御前で。よく手が震えなかつたものだなあ！。絵が出来上がると天皇様は上機嫌で、花蹊女史に対して「このものは後世畏るべきもの

二関スルニ足ルベク一好一尚ハ以テ天下女風  
ノ美悪ニ関スルニ足ルベシ……

と述べ、さらに、

諸嬢ハ既ニ上流淑女ニ必要ナル普通ノ学科  
ヲ修メテ成績ノ美ヲ呈セリ 是ヨリ進ンデ一  
学ヲ講ジ一芸ヲ修メ濫奥ヲ極メ其幽微ニ入ル  
ハ是諸嬢ニ在ノミ……

と諭しはなむけ餞とした。

神田時代は随時に入學し、また退学をした。秋  
季に一種の進級試験の如き「試業」という公開の  
発表会があり、その様子は当時の「朝野新聞」な  
どに掲載された。

したがって、その頃は卒業式などはなかった。

この第一回の一三名を初めとして大正末年Ⅱ昭  
和元年(一九二六)には第三九回の卒業式を挙行、  
七〇〇一名の卒業生を世に送った。

### (3) お塾の生活

明治五年九月の「学制発布」を機に、ようやく  
動き出した女学校開設の機運も、当分は東京中心

になるであろうな」と仰せになられて、  
「褒美をとらせる。そこにある花を持つ  
て行つてよい」と仰せになられた。

花蹊先生はすっかり恐懼して、大きな  
花瓶ごと抱え持とうとしてよろよろした。  
それを御覧になられた天皇様は大いに  
愉快になられて『さすがに花蹊は面白  
い。よい、その花瓶もとらせよう』と仰  
せになられた。と聞いているよ。」との  
こと。  
(小田切マリの稿による)

なんとも晴がましくも微笑ましいお話では  
ある。

その「孔雀の画」(『花の下みち』口絵掲載)  
とはあるいは、花蹊一七歳の画で、姉小路家  
珍重の図柄に近かったのかもしれない。

の趨勢であつた。それにつれて地方からの入学者  
も漸次多くなり、寄宿舎等の設置はまた校運を左  
右したのである。

わが国、官営初の女学校として、竹橋に開校し

た東京女学校は「生徒は女子八歳より十五歳までの事、但し凡て通ひ稽古の事」と布告して、寄宿舎の用意はなかった。

女子教育に先鞭をつけた、ミッション系の学校では少数の寄宿生はあつたが、横浜に明治八年（一八七五）六月に開校したフェリス女学校は、校舎とともに寄宿舎をも新築した。

### 跡見学校と「お塾」

「鳳曆嘉慶、御代泰平」という四字句、二文で語られる神田時代の跡見学校の寄宿舎Ⅱお塾は、開学前から姉小路邸の一面に間借りをした家塾として、既に始まっていた。

この八字句を、頭から一つずつ採って、一号室は鳳部屋、二号室は曆部屋、三号室は嘉部屋という風な奇妙な語呂で呼ばれていた。「おっ師匠さん」の趣味といえはそうかもしれぬ。花蹊の大阪時代の漢詩文のお師匠、後藤松陰の岳父篠崎小竹筆『小竹斎世話千字文』の冒頭句であつた。読みなれていたままに、語呂と字句の目出たさに使つたものであろう。京訛りといい、所作といい、公家の稚児さんといい、やはり世間の目を惹くこと

請け合いであつた。

私は上京後、姉小路さんの邸宅に居りましたが、邸宅が広い為に京都出身の公卿方から私の娘も預かつて呉れ、教育して呉れと申されました。其れに三条公は跡見なら大丈夫だからと云つて、今の閑院宮妃殿下なる智恵子様を六歳の時よりお預けになりました。三条さんがお預けになるからと云ふので、中山さん、萬里小路さんを始め、諸方から申込まれて遂に四十余人を引き受けることになりました。

つまり、この開学前夜の経緯こそが、跡見教育の原点だつた。教育は教室だけで終りではなくて、むしろ始まりであつた。花蹊の鋭意骨折つた「お塾教育」こそが全人教育、当時の言葉でいえば、良妻賢母養成の土壌であつた。

花蹊は、跡見女学校の校勢に触れる時、必ず寄宿舎に言及して次のように述べた。

寄宿舎ハ創立ノ際ヨリ設置シ舎監ヲ置ケド



お塾で新年を迎えた生徒たち(明治四十四年)

モ舎監室ヲ設ケズ、生徒ト共ニ起居寢食ヲ共ニセシハ、家庭的ノ薫化ヲ与ヘンガ為ナリ。

(『汲泉』一三三号)

明治八年一月開校の神田校舎

はもちろん、柳町、大塚校舎とともに、寄宿舎を設置し、神田・

柳町校舎では建築図面の大半は寄宿舎およびその関連施設であった。

その理由は、花蹊の教育思想―起居寢食を共にしての家庭的薫化こそが子女教育の根本だった、いわばその道場がお塾だった。

その家塾の運営には父重敬、公卿の奥向に仕えた、姉の千代滝はじめ一族が協力した。

寄宿舎規則(明治三十二年改正)を摘記すると、

第一条 寄宿生は毎室八名

を限りとす。

第二条 毎室に室母を置き生徒中、學術徳行の優等なるものを選びてこれに充つ。

第三条 室母は朝夕同室内の諸礼を正し学科の復習理髪着服を助け及び諸般の事を監督するものとす。

ほかに、外出・面会・帰宅・金銭等の項目があった。

室数は神田時代の八室より、明治末新築では一四号室まであった。

生徒総数に対する塾舎生の割合は、明治三十三年度で、通学生二〇〇人、寄宿生九九人。

また、『女学雑誌』(明治二十三年)によれば、生徒の出身地は東京対地方では、六一対七五人であった。

寄宿舎規則の第二・三条の室母制度は、やがて互いに姉となり妹となつて、他日の豊かな人間関係の素地となり、親子孫の三代、従姉妹で数人のお塾出身という例も稀ではなかった。花蹊・李子校長の塾舎教育の成果でもあろう。

明治十年(一八七七)の学習院開校の後も、皇后



授業時間表

曜日	授業時間				
	土	金	木	水	火
午後	裁縫、 数学、裁縫、	裁縫、 数学、裁縫、	裁縫、 数学、裁縫、	裁縫、 数学、裁縫、	裁縫、 数学、裁縫、
午前	漢學、繪畫、	漢學、習字、	漢學、繪畫、	漢學、習字、	漢學、習字、
午後	挿花(水曜日)	挿花(水曜日)	挿花(水曜日)	挿花(水曜日)	挿花(水曜日)

先頭にたった功勞者であった。かつての塾舎の教  
え子達が今もって敬慕を惜しまぬお方である。

の姪御一条辰子姫、  
北白川宮満子女王の  
御入学、あるいは閑  
院宮妃の三人の御息  
女が特設小学部御入  
学など、華族・貴顕  
の子女が相続き、あ  
る時は「跡見は御息  
所製造所」とも囃さ  
れるほどであった。

花蹊は大正八年  
(二九一九)、自らの  
八〇歳を機に、校長  
職とともに舎監のこ  
ともいっさい李子校  
長に引き継いだ。李  
子校長こそ、花蹊の  
塾舎教育の申し子と  
して、早くから花蹊  
を助けて塾舎教育の

### 3 学校体制の整備

#### (1) 校則の改正

明治二十五年(一八九二)春、一一歳で小石川柳町の跡見女学校に入学した若松会の俵松子の「おもし出」によれば、

玄関よりすぐ二階へ上がりますと左右に教室があり、右は午前中はお師匠様のお習字、かな、絵のおけいこ。午後は渡辺重石丸先生の国学、左は裁縫、午後はお花のおけいこ、階下玄関より右は広い教室、そこは私共の控え室でいくつかの机が並び、グループがそれぞれ席をとり、お話ししたりおけいこの用意、又お弁当をいただきます。

右側二教室の一は八時から九時四十五分まで数学、十時から武井先生担当の漢学、次の教室は初等科の方の国語、習字、数学、李子先生、長沢先生交代の受け持ちでした。左にまがり右側教室は、午前、漢学跡見愛四郎先生。午後、和学落合直文先生、又週二回外国婦人と工藤先生の英語のおけいこがありました。

課程表					階級	科
學數	英學	漢學	國學	學科		
算術、級數、求積、全休復習	會話、書取、小文典、ス井ントン、マコーレー、クライブ、スミット	春秋左氏傳、史記列傳、ユニオン、ロンクマン、五	古文法口授、源氏物語抄讀、萬葉集抄讀、作文作歌	古事記、枕草子、源氏物語抄讀、紫式部日記、作文作歌	四年級	本科
珠算、開平開立、諸等數	會話、書取、小文典、セーモル、萬國史	小文章範語、學	古文法口授、源氏物語抄讀、紫式部日記、作文作歌	枕草子、源氏物語抄讀、紫式部日記、作文作歌	三年級	
比、比例、百分算、及應用	神戶リダー、スパン、セリヤ、取	十八史略、日本外史、子	孟、十八史略、日本外史	徒、百首、古語拾遺、十六夜日記、古今集、作文作歌	二年級	
分數雜題、小數、循環小數	スハル、セリヤ、一、二、三	十八史略、日本外史	孟、十八史略、日本外史	假名遣、玉、百首、徒、然、草、方丈、竹取、物、語、土佐、日記、作文作歌	一年級	
珠算四則	裁縫	習字	歷史	女子漢文、讀本、新體讀本、高等小學、五、六、三、四、一、二	四年級	豫科
四則應用	裁縫	習字	歷史	女子漢文、讀本、新體讀本、高等小學、五、六、三、四、一、二	三年級	
全應用	裁縫	習字	歷史	女子漢文、讀本、新體讀本、高等小學、五、六、三、四、一、二	二年級	
全應用	裁縫	習字	歷史	女子漢文、讀本、新體讀本、高等小學、五、六、三、四、一、二	一年級	

た。

つまり、学科としては、国学、漢学、和学、数学、裁縫、英語、習字、絵画それに挿花、点茶、琴曲の課外があった。初等科があったこと、和学担当として、落合直文、増田于信、与謝野鉄幹が挙げられたことは新鮮だった。

俵の記憶を在学中の「課程表」「授業時間表」(明治二十七年改正「規則」)に照合すると、学科・課外は同じで、英語は増外である。なお「初等科」は「規則」では「学科」とある。

これらのことから、新発足の柳町時代ほぼ十年ほどは神田時代と大差はない。なお、俵の挙げた英語は課程表にはない。『跡見開学百年』年表によれば、「明治二十七年三月十六日、英学全廃につき、サンマースほか英学教員解雇」とある。しかして、明治三十四年(一九〇二)五月「従来ノ随意科制ヲ改廢シ、本科・予科・別科、選択ノ四科ヲ設ク」とある。その別科課目の中に辛うじて「英語」が加えられている。

なお、明治二十八年(二八九五)一月の「高等女学校規程」では、英語は随意課目となっており、学習しなくとも可ではあった。

ところで、「英学全廃につき……」について『教育史年表』(三省堂刊)を繰っても、当局の指示らしきものは確認できなかった。かろうじて「尋常中学ノ学科及其程度」改正で「第二外国語廢止」、「国語漢文ノ時間ヲ増加シ愛国心ヲ成育スル資料」として重視の解説や、「女子高等師範学校規程を

制定」、その中に「英語は随意科」という項があった。

このような英語科への消極的対応は、明治二十三年（一八九〇）十月の「教育ニ関スル勅語」の発布、ついで、翌二十四年（一八九一）一月のいわゆる一高教員内村鑑三の不敬事件が起き、職を免じられ、これを機に、キリスト教排撃の論が高まり、ミッション系学校などが苦境に陥り、英語熱も冷める一方、日清戦争前夜とて皇国意識が高揚する風潮にあった。

○明治三十五年四月五日、校則変更、予科を廃止。全課程五カ年とする。

本科。国文・漢文・数学・英語（随意）、習字・絵画・裁縫・地理・歴史・理科・家政・唱歌・体操

別科。琴曲・点茶・插花

○明治三十六年四月六日 新たに補習科を設ける。（年限一年）

科目。割烹・礼法・簿記・英語・習字・絵画・裁縫

○明治三十九年九月四日 校則を改め、五年

制高等女学校令に準拠。但し、絵画・習字・裁縫は配当時間を多くし、特有の課目とする。

こうして、柳町時代は校舎の新增設、施設の改廃を重ね、また、教科課程に日進月歩の工夫を加え、明治末年、やっと「五年制高等女学校令準拠」の大方針を掲げて、大正期の新展開に礎石を投じたことになる。

折しも、明治四十四年（一九一）三月をもって、閑院宮智恵子妃のたつての御要望で特設した「小学科課程」も三王女の相次ぐ卒業とともに閉じたのであった。

## (2) 当時の教科書、校風

校長先生をお師匠様と呼んでいた私の女学校跡見女学校はその昔倫理科に論語を用い、国語科は大和田建樹先生の源氏物語などが課せられ、下級では落窪物語、竹取物語など講ぜられて居りました。京都風な言葉が生徒たちの言葉に交っていました。一体温和でもお腹のしつかりした生徒が多かったように覚え



岡本かの子

ています。普通の高等女学校になつては程度が低くなるから、なかなか校長先生(跡見花蹊女史)がそれを決意されなかつたように覚えて居ます。生徒は年少の女でも堂々とした漢字の書風を習得して居ました。絵画もいわゆる跡見流の習得が校中あまねく行き渡つて居りました。和歌も服部先生という新派の先生が居られて非常に発達して居りました。

門内に桜の巨木が並んでいて、春になるととつぷりと落花に漬かる程咲き盛りその下を紫袴の生徒達が夕方寄宿舎の方から散歩に出てさまよい歩く―散歩といえは秋の夕がたの校庭の散歩もうら懐かしく想い出される。萩が大株を連ねて咲き冠つている。その傍らで校舎の間から見える遠い夕陽を眺め乍ら、故郷の唄を唱い涙ぐんで居る下級生なども居ました。何とやらいう旧大名の邸宅を敷地にあてたというこの学校には奥庭があり、昔風な池や築山のほとりに、大きな楓の樹が真っ赤に染まつていました。私はその蔭へ行つて先生にかくれては森鷗外先生の「即興詩人」など読みふけるのでした。その庭の隅には大弓

場などあり、古い英国風の校舎の建物に続く日本風の平屋には、お師匠様の謡曲のお声等ときどき聞きました。

その頃の級一番のだんまりは私でありました。「居るか居ないか分からない」といつも云われて居ました。「黙つて居る病氣の人ではないか」と噂され乍ら級中で私は一番友達に大切にされて居たような気がします。でもそんなだんまりの私が漢文や英語のおさらいなどはよくお友達にして上げました。その代わり、お裁縫の時間、むずかしいツマの形を作るときなど寄つてたかつてお友達が先生よりずつと深切に教えて呉れるのでした。

(岡本かの子『池に向いて』)

時にはパリ遊学中の息子に宛てた手紙に、

「太郎、よみうりの余技展へ画を出した(むこうで出してほしいと強つていうから)また君怒るだろうな。だけどほめられたほめられたとも批評家がついでに字までほめて蒼古ゆうけいだとよ。画はフレッシュユだという好評だ





よ。日本画の手法でアブラ画描いて見た。私、少女時代にアトミカケイの弟子だったもんね。

(岡本かの子「書簡」母の手紙)

落合直文、大和田建樹、与謝野鉄幹、服部躬治らが相次いで教壇に立った明治三、四十年代は、花蹊・李子両先生をも巻き込んだ空前の和歌ブーム、文芸趣味横溢の、また、多くの才媛を輩出した、よき時代であった。

岡本かの子(明治四十年卒)がしばしば語っている、お師匠さん花蹊の担当した「習字」の手本について付言しておく。

習字の手本は自筆法帖を旨とし、進むに従って、漢籍や日本古典または往来物などから自ら選文し、自在な楷行草を教えた。晩年は時に板行もあるが、生涯二万帖近くの法帖を書き与えている。その各種の法帖を大別すれば、次のようになろう。

○仮名系

(教養的)紫のゆかり、大嘗会、源氏文字ぐさり、名香づくし、花づくし、百人一首、明治天皇御製百首(カルタ)。

(道徳的)雲上女訓、みちの栞、東照公遺訓、

教育勅語、教訓帖、蘭言帖。

(日用的)日用文、ふみつくし、ゆきかひぶみ、習字帖、四季のふみ。

○漢字系

(教養的)聯珠詩格、赤壁賦(前後)、蘭亭記、

千字文、開化千字文、筆論、謡曲カルタ。

(道徳的)朱子家訓、司馬温公家訓。

(日用的)皇国州名、歴代天皇、世界国づくし、官職。

右の法帖のうち、「四季のふみ」は明治三十三年(一九〇〇)九月より、跡見女学校に出講することになった、大和田建樹に消息文例を請うて出来たものである。また、明治三十四年(一九〇一)には、跡見女学校蔵版『源氏読本』(四冊本)が編まれ、法帖「紫のゆかり」、「源氏文字ぐさり」はその縁で生まれたものと思われる。

なお、大和田は跡見女学校の校歌『花ざくら』の作詞をも担当して、三十三年の春の卒業式以来歌われている。



明治四十五年の大宮公園遠足

### (3) 修学旅行と遠足

花蹊は日頃から近隣や縁故の名士の庭園あるいは社寺などによく塾生や生徒を連れ出しては、春の摘み草、花見、紅葉見物、名園拝観等を楽しみ、日常生活に刺激を与え、目の保養・耳学問の機会を多くした。

したがって、社会見学の場合はもちろん、いわゆる遠足・修学旅行などの行事も早くから取り入れ、交通機関の発達につれ、行動範囲も近県から関西へと広がっていった。

#### 修学旅行史略

跡見での修学旅行は明治四十一年（二九〇八）十月の日光登山が最初の試みであった。次に過去一五年間に行われた旅行地と卒業会名、年月とを列記してみよう。

第一回 漣 会 日光中禅寺一

泊

（明治四十一年十月）

第二回 眞澄会 箱根湖畔、底倉二泊

（明治四十二年十月）

第三回 錦 会 日光中禅寺二泊

（明治四十三年十月）

第四回 早蕨会 箱根湖畔、底倉一泊

（明治四十四年十月）

第五回 九重会 桃山参拝二泊

（大正元年十月）

第六回 小百合会 長野、多治見、興津三泊

（大正二年十月）

第七回 香葉会 京都、奈良二泊

（大正三年十月）

第八回 壽 会 伊勢、京都三泊

（大正四年十二月）

第九回 玉櫻会 箱根二泊

（大正五年十一月）

第十回 眞砂会 伊勢、京都二泊

（大正六年十一月）

みどり会の修学旅行は感冒流行のため休止

第十一回 若菜会 伊勢、京都三泊

（大正八年十一月）

第十二回 桃園会 伊勢、京都三泊

(大正九年十一月)

第十三回 三五会 伊勢、奈良、京都四泊

(大正十年十一月)

第十四回 小桜会 伊勢、奈良、京都四泊

(大正十一年三月)

第十五回は関東大震災のため旅行中止

遠足回顧録

春と秋、年二回の学校行事での遠足地ではいつも職員会議が悩まされる。それは一年から五年まで、一年二度一〇回の遠足を目新しくして皆が喜ぶ所をという希望があるのと、実際の全校生徒の総動員が行われたいからである。

明治39年5月22日 代々木久米庭園

明治40年10月26日 武蔵大宮公園

明治41年10月7日 千葉県稲毛海岸

明治42年10月16日 上州太田金山

明治43年4月22日 相州江之島

明治43年10月28日 武州高尾山

明治44年4月24日 上州館林躰躰園

明治44年10月11日 稲毛海岸

明治45年4月24日 大宮公園

大正2年5月5日 江之島

大正2年10月2日 稲毛海岸

大正3年10月7日 大磯

大正4年5月12日 千葉県長者町

大正4年10月6日 鎌倉

大正5年4月27日 横浜三溪園

大正5年11月1日 飯能天覧山

遠足について概説すれば明治三十年代後半から春または秋の全校遠足が行われ、やがて春秋二回が通例にもなった。遠足地は、大宮公園、飯能天覧山、川越、吉見百穴、高尾山などの旧蹟や景勝地が挙がり、春の遠足では江ノ島、鎌倉、小田原、稲毛海岸、犬吠崎などの海浜が選ばれている。なかには、東武伊勢崎線開通直後の明治四十二年(一九〇九)十月、全校三二〇余名で太田金山新田神社に繰り出している。遠足地では当地の校友たちが競って私邸を開いては、後輩生徒の接待などに当たるのが常だった。

なかでも跡見家との縁故も深かった、横浜の三溪園原邸への遠足は好評であった。それらの遠足記、修学旅行記が校友会誌『汲泉』に載って好評を博していた。



大正6年5月10日 稲毛海岸

大正6年10月23日 飯能天覧山(芋掘り)

大正7年5月9日 稲毛海岸

大正7年10月21日 川越(芋掘り)

大正8年5月19日 千葉県犬吠岬

大正8年10月10日 安房北条萬里小路伯邸

大正9年5月14日 武州所沢飛行場を経て佛

子

大正9年10月16日 鎌倉より徒歩逗子安藤氏

邸

大正10年5月13日 相州小田原閑院宮御別邸

大正10年10月5日 房州保田鋸山

大正11年5月15日

京成電車千葉海岸

#### (4) 校友会の発足

柳町新校舎に移って二年

目の明治二十三年(一八九

〇)四月六日、開学以来初

の第一回卒業式が行われた。

卒業生は萬里小路(跡見)李

子はじめ一三名であった。

いわゆる跡見女学校卒業第

一回生となる。四月十三日には芝紅葉館で「汲泉会」の発会式を挙行、最初の校友会の集いであった。

明治三十三年(一九〇〇)四月十五日には、「汲泉会」を拡張して「跡見校友会」とし、紅葉館で第一回大会を催して、二二〇名余の出席をみた。十一月には「跡見校友会規則」を制定、花蹊を会長に、李子を主幹に推す。会員を特別と通常に分けて、桜花の徽章を制定した。これが跡見の校章の源に相当しよう。また、校友会機関誌の刊行が企図され、誌名を『汲泉』として、この六月十日に創刊第一号を校長自らの表紙絵で発行した。誌名は第一回生の「校友会」の名称を借りたもので、その主意は次の古歌によるという。

古への野中の清水ぬるけれど もとの清水を  
汲む人ぞ知る

従つて先の汲泉会を『いづみ会』と改めて校友会の諸種の会合をもつた。

李子は、昭和十年(一九三五)『汲泉』百号記念に際して「汲泉を皆様方の汲泉として、跡見の園に湧く泉を汲んで、ありし昔を偲ぶと共に、日々の体験なり、感想なりその他の文章なり、詩歌な

り俳句なりを随時に寄せられて、清き泉の本を永久に涸らすことなく、よりよい汲泉とせられることを希望します」と寄せた。以来、「汲泉」は戦前、用紙欠乏のため休刊するまで一・二・三号を発行し、校内外の多彩なまた有益な記事は学園史の史料としても出色のできばえであった。

なお、校友会は卒業年度ごとのいわゆる会名が学校より贈られ、明治三十六年度卒業生を薔薇会と呼び、以後、蓬会、櫻会などと続く。なお、それ以前の同窓者の場合を、松花会、若松会、小松会と称して、同窓の集いを娛しみ、記事などを「汲泉」に寄せている。戦後は校友会活動も、中学高校・短大・大学と個別の名称をもちながら、全体としての校友会の下、活発な活動をしている(卒業会名は四一ページを参照)。

#### (5) 厚德会のことなど

花蹊が幼時から親しんだ一族の寺、唯専寺には大阪の窮民救済に命を賭けて慕われた義人木津勘介の墓がある。

花蹊は常に生徒を訓えて、奢侈を戒め慈善を勧めた。その意を実行するため「厚德会」の結成を促し、次のように訓辞した。明治三十四年(一九

〇一)二月のことである。

他人の苦しみ悲しみを人の事として思ひもやらずうちもかへりみざらむは、同情なき人の事なり。草の一葉花の一片をだに心なく見捨てむことは神の御心にかなうべからず。泥土にしだれる萩はおこしやるべく、潦こぼれに漂ふ蟻は援けてやるべし。まして同じ人間に生を粟け同じ国土に日の光をあふぐ人どもの中に、事ありて世にさすらひわぶるものあらむには、ただに人事とのみは見捨てられむや……われら女子の身は、ことさら同情の涙をそそぎて人の為に泣かむの心得こそ肝要なめれ……

として、まず寄宿生の結髪代の一部を抛金するところから会が起り、通学生、校友と拡がり、学内には定期的抛金と随時の寄附などいくつかの会ができた。その抛金の例をいくつか挙げてみよう。最後の例は明治四十五年(一九一二年)七月、花蹊に教育功労者として叙勲のことがあり、その祝賀のために寄せられた抛金に手許金を加えて、祝

賀会の代わりに「福分け米」として当時の小石川区内の困窮者に、校友総出のお手伝いで配られたことがあった。

跡見「厚德会」その他慈善・抛金略年表

明治二十九年六月

三陸大海嘯に生徒の募った義捐金五十円を  
読売新聞に依託。

明治三十三年七月

印度の飢饉に校友会より義捐金を送る。

明治三十四年二月

慈善を目的とする「厚德会」を寄宿舎内に  
つくる。愛国婦人会や慈善事業に寄進。

明治三十五年二月

「厚德会」八甲田の凍死軍人遺族へ寄金。  
明治三十六年三月

### 漱石『吾輩は猫である』と跡見

……突然妙な人が御客に来た。十七八の女学生である。踵のまがった靴を履いて、紫色の袴を引きずつて、髪を算盤珠の様にふくらまして勝手口から案内も乞はずに上つて来た。是は主人の姪である。……雪江とか云ふ奇麗な名の御嬢さんである。尤も顔は名前程でもない。一寸表へ出て一二町あるけば必ず逢へる人相である。……

「ぢや猶悪るいわ。まるで菟藟閻魔ね」

「なぜっ。」

「なぜでも菟藟閻魔なの。……」

主人公は天探女あまのじやくで菟藟問答を繰り返す学校の先生——細君に「あれでよく学校が勤まるのね」といわれる叔父さん。姪とも口論する。「紫袴の御嬢さん」、柳町校舎近くの「菟藟閻魔」で有名な源覚寺。跡見は漱石の最も日常的な生活圏。漱石のお弟子さん筋に跡見女学校の卒業生も何人かいる。漱石はまた、女流画家といえは跡見花蹊……と論説文に登場させています。

「厚德会」東北飢饉地へ二十五円寄付。

明治三十七年二月

校友大会を中止して費用の一部千円軍事公債応募。

明治三十七年十月

「汲泉」十号を休刊、費用の一部で毛布を購入。陸軍恤兵部へ送る。以後数回。

明治三十八年四月

義勇艦隊建設のため百円を拠出。厚德会などより出征軍人に慰問袋その他を贈る。

明治三十九年二月

東北飢饉救助に寄宿舍一同、厚德会、通学生有志と次々義捐金を送る。

明治四十五年七月

叙勲祝賀会を辞退し、手許金、校友会積立金から拠金。「福分米」として米四十石施与。

大正三年二月

「厚德会」桜島爆発の映画を校内で上映、入場料を東北・九州救済に当てる。校友会も義捐金を送る。また、災害救済として職員・生徒一同より慰問袋八五〇袋寄贈。

大正三年十月

慰問袋七五〇個を中国山東、南洋、出征中の陸海軍兵士に送る。

右は、花蹊在世中に限って抽出した。

